

## 明治神宮の杜の姿

### はじめに

明治神宮の杜は面積約七〇鈔で、都内では貴重な緑の空間として、都市景観に美しさを与えるとともに、都市防災の機能や気象を緩和する機能、あるいは小鳥や昆虫の棲家などとしていろいろな働きをしています。

先の大戦のときには御社殿も戦災を受けましたが「杜」は焼夷弾にもほとんど延焼しなかったといわれています。境内の気温は周辺地域より一〜二度ほど低く夏でもひんやりとすがすがしい感じがし、参拝に訪れる人ばかりではなく、緑の中でくつろぎ、憩いを求めて訪れる人も多くいます。

このように都市の中の貴重な森となっている明治神宮

の杜。神宮の造営前から今のような森があったわけではなく、人工の森なのです。昔からの武蔵野の自然の森を保存して今日に至ったものと思っていて意外に思う方もいらつしやるかもしれません。そうした意味でこの杜の姿は古くから森林や樹木に携わる者の関心の的でした。

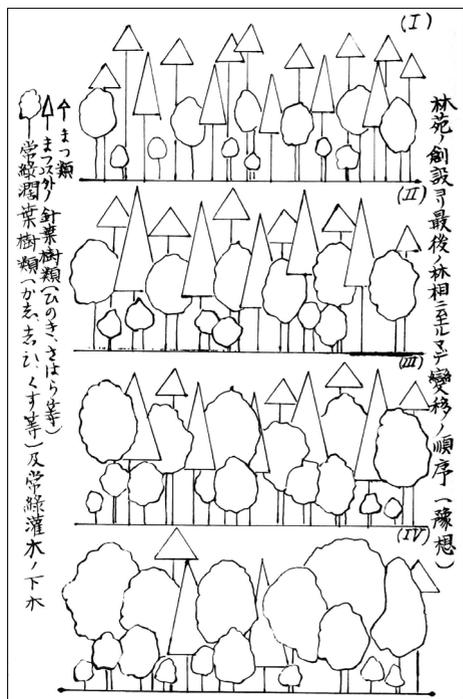
いまさらながらのような気もしますが、現在のような自然の森と見間違うばかりのこの杜がどのようにして生まれたのか、憧れのこの杜で幸いにも仕事をしている者として、この杜の姿を手元の資料を基に見てみたいと思います。

### 一 造営の経緯

明治神宮の杜の造営は、明治四五年の明治天皇の崩御

沖 沢 幸 二

に廻ります。当時の東京市長をはじめとする東京の有力者や市民は明治天皇の陵墓を「ぜひ東京に」と強く要望していましたが、宮内省によって京都の伏見桃山と決定されましたので、その後、御神霊を御祀りし、御聖徳を偲ぶ神宮を創建するという要望が東京市民にとどまらず、全国的な機運となり、政府は大正二年神宮創建を決定します。そして数多くの神宮建設の候補地の中から皇室とご縁の深かった、この代々木御料地が選ばれたのでした。



図表1 『明治神宮御境内林苑計画』  
(大正10) 所収

## 二 杜の造成

この地は、樹木の生育しているところは全体の七分の一ほどで、他は、畑地や原野、湿地などでしたので、神苑にふさわしい杜造りをしなければなりません。そして、一般的に神社林として用いられるスギ、ヒノキ等は煙害に弱いので東京のような空気汚染の著しいところでは必ずしもその生育を期しがたいことから、風土、気候に適し、各種危害に抵抗強く、人手の補植を要しないクス、シイ、カシ等の常緑広葉樹の天然更新による杜造りをすることにしたのでした。

また、杜造りにあたって、五〇年後、一〇〇年後の変化の過程を想定した予想林相図を作成しました(図表1)。造営直後は在来のアカマツと新植のクロマツを中心に仮設的な一次の景観を保ち、やがて成長の早いヒノキ、サワラ等が林冠に進出しはじめ、マツ類は衰退します。さらに、最後には常緑広葉樹が林冠を占有して極相林の様相を示すという百数十年の時間と自然淘汰の先見の明を持った、長編のシナリオに基づいた杜造りを全国から寄せられた献木約十萬本を用いて実施したの

図表2 明治神宮林苑の遷移

	調査年	目通 10 ～ 30 <sup>センチ</sup> 未満	同 30 <sup>センチ</sup> 以上	計
針葉樹	① T13	-	13,647	13,647
	② S 9	-	18,202	18,202
	③ S45	190	5,019	5,209
	④ H13	2,288		2,288
常緑広葉樹	① T13	-	6,422	6,422
	② S 9	-	8,611	8,611
	③ S45	19,590	12,547	32,137
	④ H13	55,911		55,911
落葉広葉樹	① T13	-	6,428	6,428
	② S 9	-	5,141	5,141
	③ S45	5,288	6,413	11,701
	④ H13	11,962		11,962
計	① T13	-	26,497	26,497
	② S 9	-	31,954	31,954
	③ S45	25,068	23,979	49,047
	④ H13	70,161		70,161

注：区分の10cm,30cmは、樹木の目通り（地上130cmの位置）の周囲長です。  
昭和45年の調査は目通り、平成13年の調査は胸高直径（地上120cmの位置）直径の調査です。  
胸高直径3cm≒円周10cmとしました。  
「目通り」や「胸高直径」は、測樹学上定義されたものです。

また、平成一三年と比較可能な目通り一〇<sup>センチ</sup>以上のものについて見てみると、針葉樹では、③五、二〇九本、④二、二八九本と約二分の一に減少し、常緑広葉樹では、③三一、一三七本、④四五、九一本と約一・七倍に増加し、全体の八〇%を占めます。落葉広葉樹では、③一一、七〇一本、④一一、九六二本とほぼ横ばい、合計では③四九、〇四七本、④七〇、一六一本と約二万本増加しています。

調査が異なるために全てを比較でき

です。

### 三 杜の推移

造成後の林苑がどのように遷移していったのかはどなたも興味のあることと思います。

これまで行われた杜の調査（図表2）は、大正一三年（記述の都合上以下①とします。目通り三〇<sup>センチ</sup>以上を調査、昭和四一〇一年（同②。御苑を除く）、そして昭和四五年（同

③）には境内一斉調査が、また、平成二一〜二三年（同④。胸高直径三<sup>センチ</sup>以上を調査）に宇都宮大学が禁足地を除く地域において行っています。

大正一三年との比較可能な目通り三〇<sup>センチ</sup>以上のものについて見ると、針葉樹では、①一三、六四七本、②一八、二〇二本、③五、〇一九本と約三分の一に減少し、常緑広葉樹では、①六、四二二本、②八、六一一本、③一二、五四七本と約二倍に増加し、落葉広葉樹では、①六、四二八本、②五、一四一本、③六、四一三本とはほぼ横ばいとなっています。

ないのですが、針葉樹は衰退し、常緑広葉樹が確実に杜の主林木として成長し、八〇余年を経過して、当初予想した最終段階の姿の、照葉樹の杜としてのスタートラインについたと言えます。

また、杜の植物全体（フロラ調査）としてみると木本では③三〇〇種が④二八六種に、草本では③三五二種が④三四八種に、シダ植物では③三〇種が④五五種と、消滅した種、新たに入ってきた種により、合計では③六八二種が④六八九種と多様性を保っています。

今後、一〇〇年二〇〇年といった大きな流れの中で、ゆるやかに増減しながら最終的には、樹木一本一本がゆつたりと枝葉を広げた本当の天然の杜になっていくのでしょう。その杜の長いサイクルの中で、私たちが関われるのはほんの一瞬なのですが、日々この杜を見守っていきたいと思います。

（明治神宮林苑主幹）